

# 全国幼稚園教育研究大会の報告

舟木哲朗

去る十月二十八日から三日間、松江市で「全国幼稚園教育研究大会」が開催された。これは、鳥根県幼稚園教育研究会の結成十周年を記念し、この会が、鳥根県教委ならびに松江市教委との共催で、文部省、鳥根大学その他たくさんの方々との関係団体の後援を得て行なったものである。

鳥根県には、全県的な幼稚園の団体は一つしかない。それが、この鳥根県幼稚園教育研究会である。この会は、国公立や私立の差別をつけずに、全く同じ考えで、同じ目的のために活動している。これは、鳥根県の幼稚園が他に誇り得るもので、過去十年間にわたって、研究についてのかなりな実績をもっているのは、実にこの会に負うところが大きい。

さて、大会は、第一日全体研究（於松江市公会堂）第二日分科別研究（於松江市内六幼稚園）第三日特別研究（於国立公園大山）という構成で行なわれた。第一日の全体研究では、開会式に続いて、鳥根大学の近藤正樹氏とお茶の水女子大学平井信義氏の講演があり、続いて、「幼稚園教育の振興について」というテーマでシンポジウムが行なわれた。第二日の分科別研究では、テーマ別に六

会場に分かれて、それぞれ研究がすすめられた。分科会の構成は、つぎの通りである。1、これからの幼稚園経営はどのようにすすめたらよいか（於松江市立津田幼稚園）2、幼児の健康生活の指導はどのようにすすめたらよいか（於鳥根大学附属幼稚園）3、幼児の知性の芽生えはどのように育てたらよいか（於松江市立母衣幼稚園）4、幼児の情操を豊かにするにはどのようにしたらよいか（於松江市立朝日幼稚園）5、幼児の道徳教育はどのように考えて実践したらよいか（於松江市立乃木幼稚園）6、幼児に望ましい心情態度を培うために視覚的方法をどのように活用したらよいか（於松江市立雑賀幼稚園）

なおこのほかに、P.T.A.を対象とする講演会が、鳥根大学山根精一氏によって行なわれた。第三日の特別研究では、文部省森純五氏の講演と研究討議の後、閉会した。以上が大会の概要であるが、この大会としての特徴的な運営は、第二日の分科別研究にあった。

## ○公開保育

各会場とも、保育は午前八時三十分から十時まで、一時間半にわたって公開され

た。この分科会では、室内で簡単な用具（マット、平均台その他）を使った運動（二年保育年少組）力くらべを中心にした園庭でのいろいろな遊び（二年保育年長組）および遊戯室での体育的なリズム遊び（一年保育）を中心とした活動として展開した。しかしこの公開保育で特に考えたことは、一時間半の保育が、平常の一日の保育を圧縮（というより、ある部分を圧縮）するという形にすることであった。つまり、この保育の中に、一日の園生活の過程が一通り出てくるようにするという仕組みである。従って、一斉的な取り扱いだけでなく、自由遊びも日常生活的なものも、みんな公開した。

そのために、指導案も、登園から登園直後のこと、登園してきた幼児から次々に遊びを展開すること、視診、全幼児がいっしょに活動すること、遊びの中の個別指導、片付け、降園の準備、降園などのすべてを取りあげた。また、実際にそれらのことをみんな公開した。われわれは、ほとんどの保育研究はこれではなければならない、と信じている。個々の教材の指導技術（テクニク）だけを問題にしていたのでは、保育研究は行き詰まると思う。幼児に対して、個々の知識や技術をバラバラに身につけさせるのではなくて、幼稚園生活を通してどのような人間形成をしていくかということ、これが当然のことではあるが、現状はその当然のことに、ほとんど手がつけられていない。われわれは、この当然のことに手をつ

けてみようとしたのである。そして、出席者の方々に、その公開した保育を素材にして討議していただき、保育のあり方を、ともに研究したかったのである。

しかし、討議は、必ずしも期待通りにはすまなかった。われわれはしかし、この信念に間違いはないと思うので、今後この方針を堅持したいと思っている。

### ○研究発表

研究発表は、会場になった幼稚園だけでなく、全県的な視野から、更に全国的な視野に立つて展開するという方法をとった。この方法も、各分科会共通である。

第二分科会では、われわれの園の共同研究として「園児の運動能力と関係要素の基礎研究」と題する発表、島根県玉湯幼稚園今岡三都枝教諭の「農村幼稚園における健康安全教育の推進とその障害の打開」出雲市立四給幼稚園原美和子教諭の「園給食は子どもにどのような影響を与えたか」および東京都桐朋学園幼稚園大場牧夫教諭の「新しい幼児教育と遊具のもつ役割について——」の四つの発表を行なった。

発表内容としては、運動の問題では、われわれの幼稚園の園児に運動能力測定を試みた結果を統計的に処理し、それを他地域のものと比較しながら幼稚園児の運動能力の発達を概観した。その結果、四才から五才にかけての発達は驚異的であることを明らかにした。また、種目によって、個人差が極度に大きいものと個人差の小さいものがあることを明らかにした。更に、男女の

相異についても、おもしろい傾向を見出した。続いて、運動能力相互の相関をしらべたが、体位と運動能力の相関をしらべたが、ここから「脚」の発達と運動能力との間におもしろい関係があったり、体位と運動能力との相関は、男児よりも女児に、また五才児よりも四才児に多く見られることなどを明らかにした。続いて、幼児の性格と運動能力との関係を検討してみた結果、一般的には自主性のある幼児に運動能力が高く、社会性は能力と深い関係のあることを明らかにした。また、精神的統一を必要とする運動はやや神経質な幼児がすぐれ、全身的力量を必要とする運動では攻撃的衝動的な幼児がすぐれているというおもしろい傾向が見られた。最後に、運動能力に見られる練習効果の実験研究を発表したが、まりつきでは、僅かの練習で著しく効果があるのに対して、ボール投げではあまり練習効果があらわれないことを明らかにした。このことから、幼児の運動能力というものに対する見方・考え方を再検討する必要のあることを提案した。

以上の研究成果から、日常の保育実践上留意すべきの問題を考察した。

健康安全衛生の問題では、農村における幼児の健康生活のための習慣（しつけ）の実態を明らかにし、生活習慣の形成がうまくいかない原因を追求するとともに、それを克服するための幼稚園の実践とその結果が報告され、また、通園途上の安全についての独自の方法が発表された。要約すると、生活指導では、両親祖父母を中心とし

て地域全般への啓蒙、幼稚園の環境構成と根強い指導、幼稚園と家庭との緊密な連絡ということになるが、この幼稚園では、幼児が入園する前に家庭訪問して入園前から家庭の指導に幼稚園が積極的な手を打っていることが発表され、注目された。

給食の問題では、これが単なる栄養だけの問題ではなくて、食事を通しての全面的な生活指導に役立ち、また、保育内容の自然な言語や社会に関する取り扱いに効果的であることが、さらに「同じ釜の飯を食う」ことからくる近親感や、幼児の性格が明るくなったことなどが報告された。

最後に遊具の問題では、従来の遊具に関する研究発表が、ただ傾向を明らかにするだけにとどまって日常の保育実践に役立っていないことを指摘し、さらに従来の幼稚園教育が犯しているあやまちを指摘した。そしてそこから、これからの幼稚園教育は如何にあるべきかということを提案し、さらにそこから遊具の役割りをつぎの三点にまとめ、新しい見解を明らかにした。

● いろいろ運動能力の調和のとれた発達。  
● 運動能力を伸ばし、精神的諸問題を解決する。  
● 仲間意識をつくる。

### ○研究討議

以上の発表は、いずれも「健康」指導ではきわめて重要なことであり、しかも従来あまり手のつけられていないことである。そこで討議は、かなり突込んだ真剣なものであった。惜しいことは、討議の時間が不足して会員の意見が出つづきないうちに閉会せざるを得なかった。（島根大学附属幼稚園）